

「USHひとづくり・まちづくりボランティア in 南相馬」8月期 報告書

英語文化コミュニケーション学科 3年
英語文化コミュニケーション学科 2年
基礎課程 1年

学生8名で、8月18日から20日の間、南相馬へ行きボランティアを行いました。

初日は、次の日のさゆり幼稚園のお祭りのために、準備を行いました。そこで初めて幼稚園の先生方、一緒にお手伝いする保護者の方々とお会いしました。私達に対して、「次に何をしたい」といったことを優しく教えてくださいました。体調について気遣ってくださいました。暑い中でしたが、皆様、こどもたちのことを考えて、進んで準備に取り組んでいらっしやうのが印象に残っています。これまで自分たちが参加していたお祭りは、このような苦労があつて開催されていたのだと裏の準備の大変さを学びました。また、カリタス南相馬のスタッフの方々ともお会いしました。皆様、あたたかく迎えてくださって安心感を感じることができました。

この日は人のあたたかさや、人を想う気持ちというのを感じることができました。

夜にはカリタス南相馬の南原所長から福島や原発についてお話を伺いました。震災による地域の分断、地域の高齢化、ソーラーパネルの設置、エネルギーをどう作っていくか等、福島で起きている問題は日本の未来に起こる問題でもあるという言葉が印象に残りました。また、南原所長の多くの勉強量と、行動力に驚かされました。

2日目は午前中にさゆり幼稚園の夏祭りのお手伝いをさせていただきました。8時半頃から夏祭りの設営など準備を行い、10時から12時頃までお祭りを開催しました。当日は猛暑で冷房をととても恋しく感じましたが、こどもたちの笑顔と保護者の方々のこどもを楽しませようという熱量を感じて頑張ることができました。また、私は夏祭りにどれだけ多くの人に関わっているのか考えたことがありませんでした。そのため今回は一つのイベントに大勢の方が関わってくださっていること、こどもたちの笑顔は何物にも代えがたいことを知ることができた貴重な機会になりました。

午後には南原所長に福島県の双葉町や大熊町の現状を、車で移動しながら説明していただき、東京電力廃炉資料館を訪れました。このボランティアに参加する前は、震災からすでに12年経っているため、当時は崩れてしまった家やバラバラになってしまった人達も戻ってきているはずだというイメージを、調べることもせずに持っていました。しかしながら、双葉町や大熊町は完全には復興しておらず、震災当時に壊れたままの家を見て今まで知ろうとしなかった自分を恥じました。廃炉資料館では、原子力発電所の崩壊と廃炉作業を説明していただきました。1号機から4号機までそれぞれ異なる原因で事故が発生し、1号機の水素爆発の原因はまだ判明していないことを知りました。そして、廃炉作業には30年から40年かかることを聞いて、改めて原子力発電の弊害について重く考えさせられました。

3日目は大熊町、双葉町、浪江町をバスで周り、町の様子を震災前後で比べながら説明していただきました。そして、とみおかアーカイブミュージアム、請戸小学校、東日本大震災・原子力災害伝承館、浪江町東日本大震災慰霊碑を訪れました。

特に印象に残ったのは、原子力発電所誘致の記事(昭和46年5月15日)です。そこには、原発は公害のない企業の王様、地元住民の所得増加、長期的間労働者として確約される、財政規模の拡大による福祉の向上、など原発によってバラ色の未来が訪れると掲載されていました。私はこの記事を読み、怖いと感じました。なぜなら、公共施設である役場から配られる記事である為です。私も原発事故が起きる前にこの記事を読んでいたら、原発は地球にも優しい、利益も得られるとても良い資源だと考えると思いました。その当時は、原発によって町が、家族がバラバラにされるという未来が訪れることを誰も予想していなかったことでしょうか。このことから、地球温暖化が大きな課題となる現代においてエネルギー問題を人任せにせず、自分自身で考えなくてはならないなと感じました。